

237  
137

山倉神社略緣起



特50  
574



山倉神社畧縁起

香取神宮禰宜伊藤泰歳



山倉大神社

在下總國香取郡山倉邨金峰距東京東二十二里

祭神 高皇產靈大神

配祀神 健速須佐之男大神

大物主大神

鎮座

當社ハ人皇五十二代嵯峨天皇の御宇弘仁二辛卯年十一月初卯日  
國內諸民の疫癘に罹る者の多きを歎け病災消除の爲め香取郡山  
倉郷なる金峯こがみねに勸請し奉る處を世俗大六天王ともまゝ大六天



神の社とも申すハ健速須佐之男大神を配祀るが故を」と謂へり  
維新後は單ニ山倉大神と稱す

祭神並配祀

抑正祀高皇產靈大御神と申奉はハ造化眞神ニおはたまはして其神  
德廣大無遍ニして天地を鎔造萬物を發育一世の中に有りとある  
もの、限り此御恩頼ニ洩はも洩あることあり

配祀建速須佐之男大神は天照皇大御神の弟神ニまはして武塔天神  
とも申又牛頭天王とも申奉る健く潔き御功德茂もて疫氣を攘ひ  
給ふ備後風土記といへる書に曰く昔北海に坐一武塔神南海神姫  
御子にともひみ出ますに疫隅の國にて日暮きより彼所に將來二  
人あり兄を蘇民將來といひて甚貧一かりき弟を巨且將來といへ

富饒ニして屋舎一百ありき爰に武塔神宿處を巨且に借りたまふ  
に惜もて貸まつらす故に兄の蘇民將來に借り給ふにとるこびて  
かゝ奉る粟柄を以て席とかり粟飯をもて饗一奉る饗奉ること既  
に畢て武塔神出ませり其後八柱の御子を率て還り來まして詔曰  
く我汝に報酬せんと思ふ汝子孫ありやと問給ふ蘇民將來答申  
さ々おのき女子と此婦と侍ふと申す即武塔神詔曰く茅をもて輪  
をつくり腰のほどりに着しめよとみことこのまにまにつけしむれ  
ハ其夜に疫病大く行りて蘇民と女二人とを置て皆悉に死うせた  
りき即詔またく我ハ速須佐之雄神なり疫氣あらハ汝蘇民將來  
の子孫と云て茅輪をもて腰のほどりにつけよとせハ家なる人  
ともハ免かきむとのりたまひきと見へたり

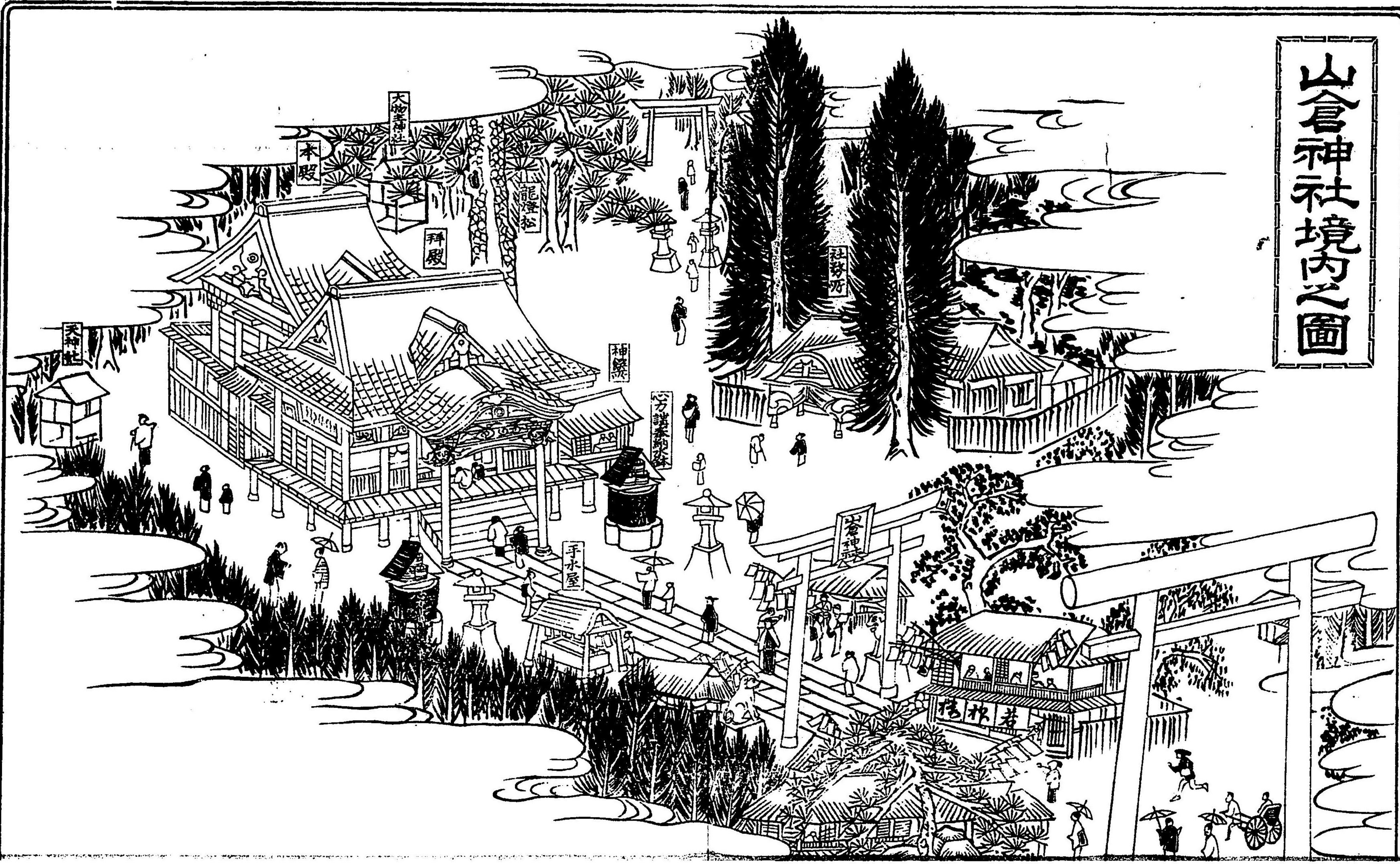


大物主大神ハ大國主命の和魂の神ニ坐して大和國城上郡大神神  
 社に坐神なり無窮に幽冥の事を掌まいて國神の曾と坐すが故  
 大物主とい申すなり此御名ハ八百萬の國神を帥て天上に參上  
 り歸伏ませる事由を申し時に皇產靈大神より賜へる御名をこと  
 云へり如此奇しく大なる御功績なるが故に癘鬼疫神等は皆御神  
 徳を恐まかしてこと奉らざるハあらざるなり昔師木水垣宮に天下  
 知し召し崇神天皇の御代ニ天下に疫病多し起りて人民死て盡な  
 んとせしハ天皇大ニ愁ひたまひて神床みおはしりて御祈り  
 坐まし、夜大物主大神御夢み顯はれましてこハ我をこゝろなり  
 意富多々泥古を以て我御前を齋き祭らしめバ神氣ハ起らす國ハ  
 安く平らきなんと御告めらせられたりてハを以て駅使を四方へ



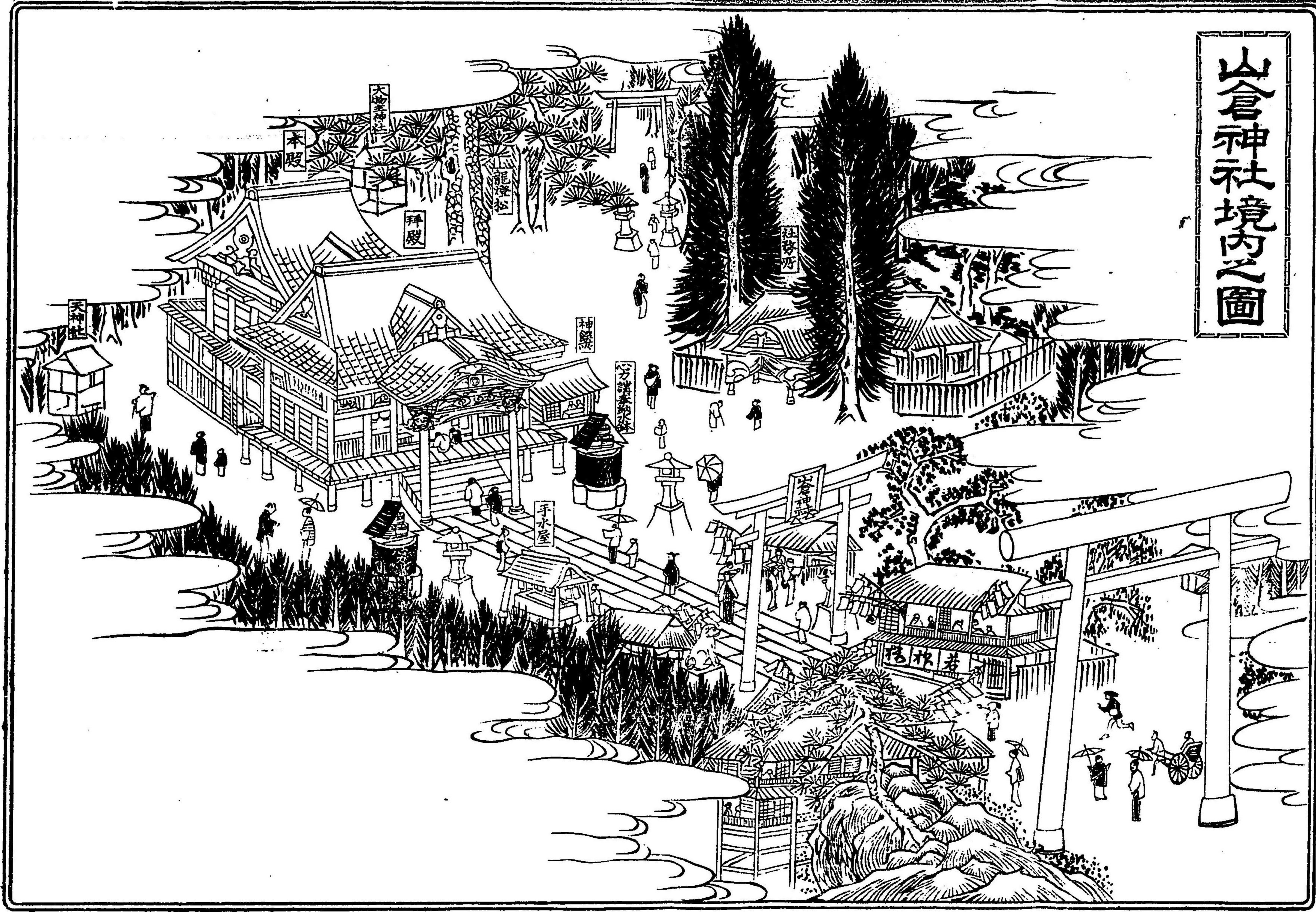


山倉神社境内之圖



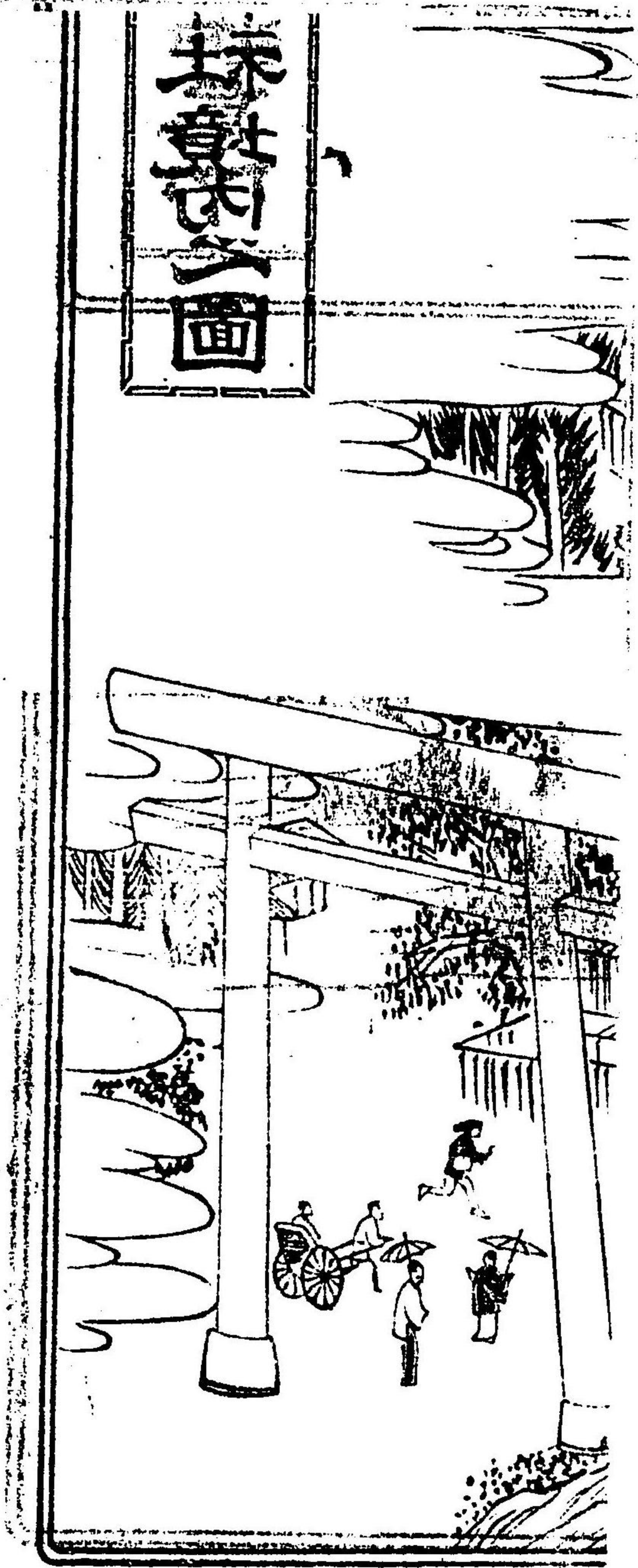


山倉神社境内之圖





抹齋之圖



班を遣はされて意富多々泥古といふ人をお見めなされたるに河  
内國若江郡おほ美努村と云處にて其人を見得て參らせたりけれ  
ば天皇大に歡ひ給ひ如此てこそ天下平らき人民富榮にめと仰せ  
られて意富多々泥古を神主として御諸山に大三輪の大神をいほ  
れまつらしめたまひけり

故み高皇産靈大神を始め奉り建速須佐之男大神大物主大神を齋  
き奉りて山倉大神社と稱へ奉り靈驗著明なるに依て昔より天下  
疫癘の流行せる時ハ遠近の國々より信仰の諸人ハ信仰講社の東京横  
京おほ麻布友心講深川心力講攝實珠講等三の多きなる講社あり此神垣の内み參詣來て疫災消除を祈り  
稜威の御守護を願又御靈代の神興を迎ひ居ながらにして神徳を  
仰き奉るかと崇敬謂んかたなきあり



因に云こが山倉神社講社ハ常陸國眞壁郡伊讚村大字小川ニありて崇奉の講社員ハ磐城磐代上下野州等又幾千を以て數ふるニ至る實ニ盛なりと謂べし

龍燈松

社殿の側に龍燈松といへる老松あり樹陰ニ小祠あり綿津見大神を祀れり

祭典

大祭ハ毎年陰曆十一月の初卯の日を以て執行す寅の日神輿を仮殿ニ出御し奉り卯の日本社に還幸す此兩日とも古式の祭儀あり神供ハ荒妙和妙神酒神饌海河野山種々の物あり殊ニ龍宮神献の鮭魚の贅ハ世人の克く知る處あり

小祭ハ毎月一日陰曆朔望の日及ひ初卯の日にして臨時祭典ハ毎年陰曆三月九月ニ日を卜してみきを執行せり

鱈魚

毎年大祭日初卯にハ必キ鮭魚を贅として備奉るものとハ往古よりの舊式なり然るニ此地ハ海川遠く離れてさる魚などハ得難かるを此大祭の近き日頃ニ至るニ或ハ山野の渚水或ハ田畔の小溝などニ該魚の鱈き居るを不圖見出捕得て獻ること毎年ニ或ハ三四尾或ハ五六尾に及べり實に靈しく奇しく神事ならきやみきを世俗龍宮神獻の鮭といふ大祭當日は此鮭魚の直會の生肉を仮殿ニ於て參詣の諸人に頒與し平生ハこれを焼き貯へ置て而して本社に於て拜戴しめ神威赫々たる冥助を各々に蒙らしむるありけり



なりて

編者云此書は我香取神官々司香取正七位此頃山倉神社兼務の事を了諾し官に稟申して予をして社務監督の事を命すこれに依て予該社に在勤するの日信者の請に依り舊記を穿鑿して神徳を畧記し世俗の了解し安からん爲め山倉神社畧縁起と題して與ふるところのなかり尙委しき事の後日山倉神社神徳記を書して謂ふべきは看者此書の簡易に過るを咎る事勿き

明治廿二年十一月初卯日

明治廿四年七月十四日印刷  
同年七月十五日出版

價金貳錢

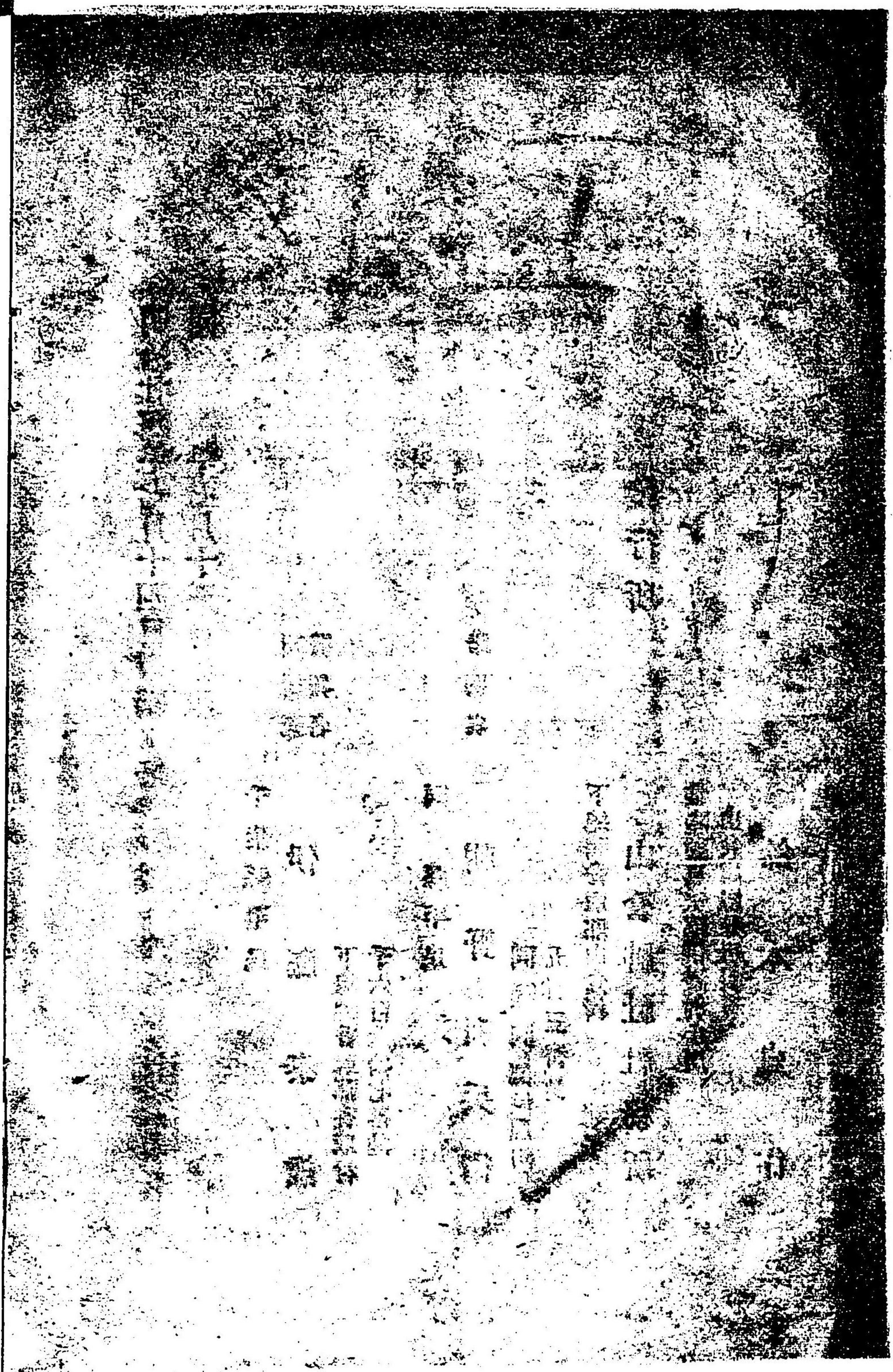
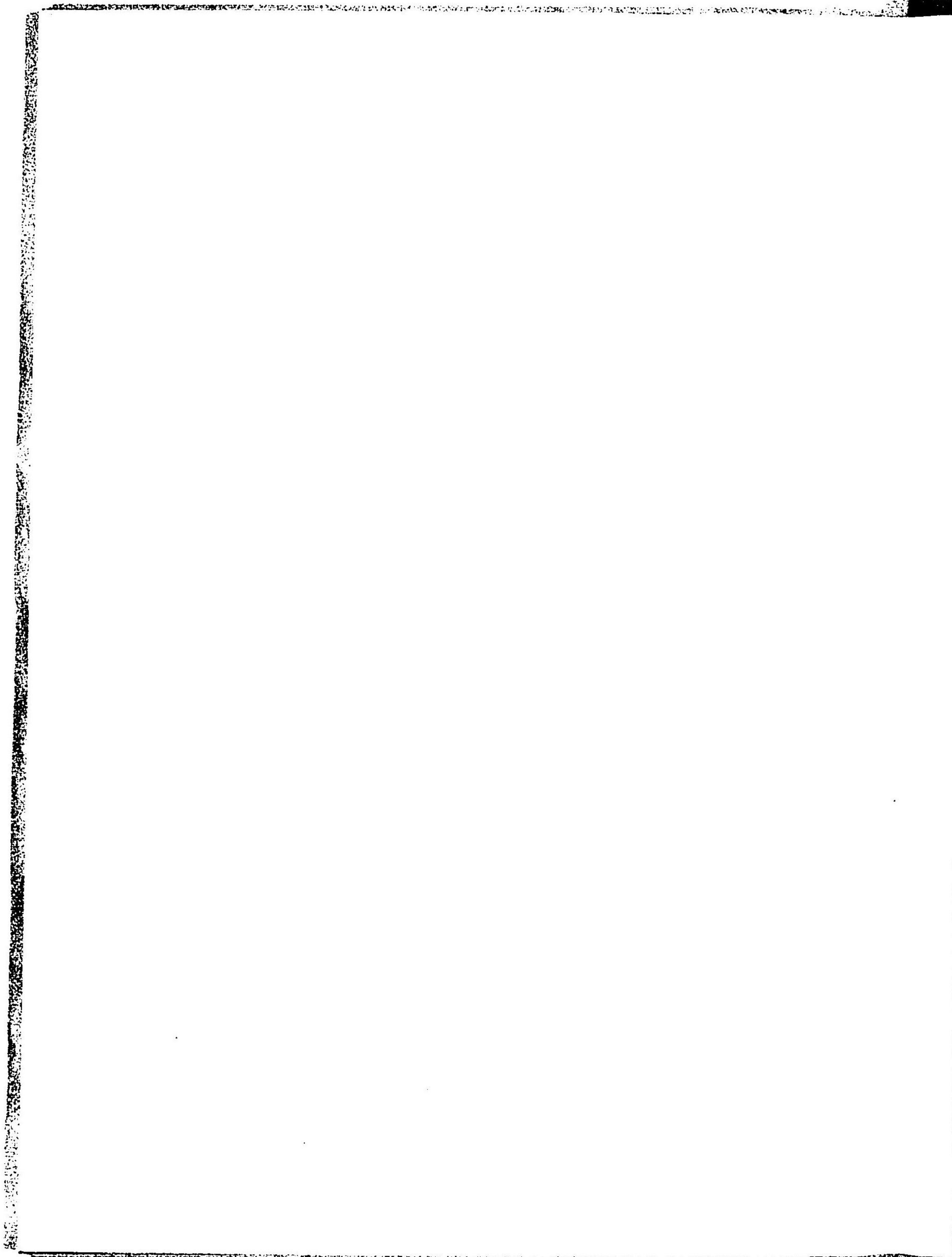
編輯兼 千葉縣平民 伊 藤 泰 歲  
發行者 下總國香取郡香取村 千六百六拾七番地

印刷者 同 縣平民 朝 野 利 兵 衛  
同國同郡佐原町 五百三番地

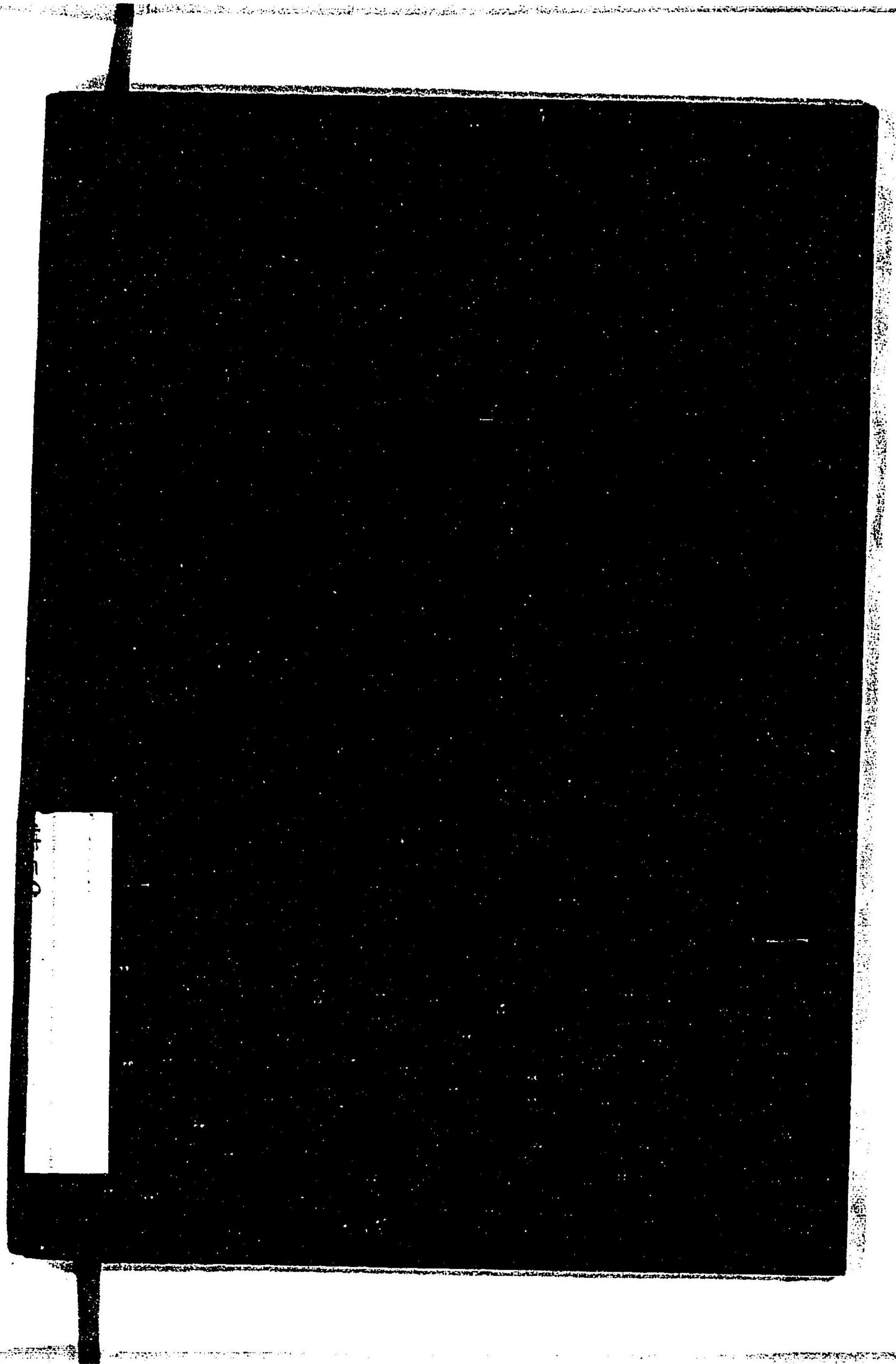
發行所 下總國香取郡山倉村 山倉神社社務所  
常陸國眞壁郡伊讚村小川 山倉講社分社長 鈴木 貞 作

佐原話版社印刷









0



特 50

574

山倉神社略縁

国立国会図書館

014686-000-2

特50-574

山倉神社略縁起

伊藤 泰歳/編

M24

ABB-1123

